

古代の助詞「すら」について

此 島 正 年

一、意義 (一)類推

助詞「すら」は、いつの時代にもその用いられることが少いくせに、古来ほそぼそと命脈を保って現代にまで至っている、やや風変わりな語である。古くは「だに」に代られ、近世以後は「さえ」に圧迫されながら、「だに」が近代語では全く亡びてしまったのに、全盛の「さえ」の傍に今なおささやかな自己の分担を守っているのである。

万葉集においても「総索引」によると、「だに」の約九〇例、「さへ」の約六〇例に対して「すら」は三〇例でやはり少ないといえそうである。しかもこの時代には「すら」が「だに」「さへ」に対立して最も大きくその独自の領域を持っていた時なのである。

「すら」の意義については、古来「一事を挙げて他を類推させる意」であるというのが普通の説で、これはたしかにそのとおりである。「すら」といえば、われわれは「獣すらなほ恩を知る。況んや人に於てをや」というような漢文訓読の語法をただちに思い浮べるが、このように下に「況んや」とか「まして」とかいう副詞を伴う形式は、「すら」の意義をよくあらわしているように思われる。万葉集で「すら」の表記の大半が「尙」字であるのも、このよう

に訓読する漢文にこの文字が用いられていて「すら」と訓ぜられたからであろう（後世の訓読では「尙」を副詞「なほ」とし、「すら」を上^にに補読するのが普通になった）。

夢にのみ見て尙^もここぞ恋ふる吾はうつつに見てはま^ましていかにあらむ（卷十一・二五五三）

この歌は、夢を挙げて現実を類推するのに、類推を「ま^まして……」であらわしており、いわば前記の型どおりの表現であるが、このように形式の整った例は万葉にはこれ一つしか無く、他はすべて類推事項を省略している。例えば

鴨尙^も己が妻どちあさりしておくるるほどに恋ふちふものを（十二・三〇九一）

は、「ま^まして人間の夫婦がおくれて恋うのはあたりまえだ」の意を省略しており、

かくしつづ遊び飲みこそ草木尙^も春は咲きつづ秋は散りゆく（六・九九五）

は、「草木すら……。ま^まして人間は栄枯盛衰常ならぬ」の意を省略して、「だから、かくしつづ……」と上句へかかって行くのである。

たちねの母がその業の桑尙^も願へば衣に着るといふものを（七・一三五六）

は、「ま^まして私^があなたに恋をうちあけて願えばうけいれて下さるのがあたりまえだ」の意を省略しているが、注意すべきは、「しかし事實はうけいれて下さらない」という第二段の逆の含蓄を持っていることで、歌にはこの種の二段構えの用法が多いのである。

軽の池の浦回^{すら}行きめぐる鴨尙^も爾玉藻の上にひとり寝なく（三・三九〇）

この歌では、「ま^まして人はひとり寝などしないはずだ」と類推させ、第二段に「しかし実際には自分はひとり寝をしている」という恋人への恨みを含蓄している。この第一段の類推だけ省略して第二段の表現されている形式がある。

例えば

言問はぬ木尙妹と背ありといふをただひとり子にあるが苦しさ（六・一〇〇七）

では「木すら妹と背があるから、まして人はあるはずなのに、実際は自分は一人子である……」というふうに、傍線
の所が省略されているのであって、類例がかなりある。

旅に尙紐とくものを言繁み丸寝わがする長きこの夜を（十・二三〇五）

第二句の下に「まして故里では紐をといて安らかに寝るはずなのに」の意を補えばよい。

夕されば蘆辺にさわぎ明け来れば沖になづさふ鴨須良母妻とたぐひて……さ寝とふものを……跡も無き世の人に
して別れにし妹が着せてし馴れ衣袖片敷きて一人かも寝む（十五・三六二五）

も、やはり鴨の雌雄の共寝を述べて、次の「まして人はそうあるべきに」を省略して、現実の妹の死去へと続けてい
るのである。

以上、「すら」の意義について古来普通に言われている類推の例を万葉から挙げたのであるが、わたくしの考えで
は、厳密にこの類推の意にあてはまるのは万葉三〇例中八例くらいであり、他の多くの例は、類推とはいえても前述
の用法とはかなり性質の違うもので、むしろ別の説明を加うべきものが少くない。次に節を改めてこれについて述べ
よう。

二、意義 (一)特出

いったい、類推という以上は、類推の根拠となる事項よりも、それによって類推される事項の方に、表現の重点が
あるわけである。そうして、前節で挙げた歌ではたしかにそのとりで、根拠事項（この中に「すら」が用いられてい
る）よりも、類推事項（「まして……」の意の部分）が、たとえ表現面では省略されていても、作者の表現しようと

意図している焦点であった。「鴨すらも雌雄共寝する」といえば、「まして人間はそうする、そうすべきだ」ということが作者の伝えたいことなのである。ところが次のような用法ではどうであろうか。

弥彦おのれ神さび青雲のたなびく日（須）良こさめそぼ降る（十六・三八八三）——（須）は伝本に無いのを通説によって補う

言問はぬ木尙春咲き秋づけばもみぢ散らくは常を無みこそ（十九・四一六一）

勿論これらも「青雲のたなびく日ですらこさめが降るのだから、まして天氣の悪い日は甚だしい」「木すら春秋の栄枯盛衰があるのだら、まして人間はそうだ」という類推の意のあることは同様だが、しかし注意すべきは、これらでは現前の「青雲のたなびく日すらこさめそぼ降る」「言問はぬ木すら春咲き秋づけばもみぢ散る」事実には作者の表現意図の焦点があるのであって、「まして天氣の悪い日は……」「まして人間は……」という類推事項の方は、表現面にあらわれていないばかりでなく、表現意図の点でもバックになっているのである。作者の心は、弥彦山が晴れた日にも雨が降る事実、物言わぬ木にもおのずから変化のある事実、奇異の思をいだいている——それがこれらの歌の主題である。

更に次のような例はどうか。

大空ゆ通ふ吾須良汝が故に天の河路をなづみてぞ来し（十・二〇〇一）

布肩衣有りのことごと着そへども寒き夜須良乎吾よりも貧しき人の父母は飢ゑ寒からむ妻子どもは乞ひて泣くらむ（五・八九二）

息の緒にわが息づきし妹尙乎人妻なりと聞けば悲しも（十二・三一五）

これらでは、もう類推の意は、無いとはいえないにしても、ほとんど裏にひそんでしまつて、表現におし出されてい

るものは、「大空を通うことのできる吾なのに汝のためには天の河路を難渋して来たこと」「あるだけの着物を重ねても寒い夜なのに、貧しい人の父母妻子はそれを防ぐ方法の無いこと」「心から思いこんだ妹なのに人妻だと聞くこと」等に対する強い奇異感である。このばあい裏にひそむものは、「余人はともかく大空を通う吾が」「ほかの時ならともかく……のような寒い夜に」「ほかの女ならともかく息の緒に息つき思うた妹を」のように、むしろ類推事項を退ける気持であり、これによって「すら」はその承ける語を強く押出して、それと意義上調和しない下の叙述へと続けるのである。そうして、その上下の不調和（これを前記のように……なのに……」と訳出するとよく分る）から奇異感が生ずるわけである。

極端を挙げる点では類推もこれも同じだが、類推が極端を挙げて他を思わせることに重点があるのに対し、これは普通から区別して極端を「特出」する用法ともいうべきで、この特出の「すら」が、万葉では全用例三〇例の中少くとも二〇例はある。私はむしろこの方が「すら」の本義だったのでないかと思う。それが、次第に表現の重点を類推事項に移して、漢文訓読の「……すら……。況んや……」のような用法が「すら」の本質とされるようになって行ったのではなからうか。ともあれ、古代の「すら」は通説の「類推」だけでは真意のつかめなればあいの少くないことを注意しなければならぬ。

三、「だに」との関係

「すら」が「だに」と同類の語として考えられていることは周知のことであって、早く富士谷成章の「あゆひ抄」では、「すら」の項に「何だに」と心同じ、古集すら・だに・両本なる歌おほきをおもふべし」と説き、「だに」の項では「其ひとつをいひあきらめて、このりをおもはせる詞也」といっているから、成章は類推の意をあらわす助詞とし

て両者を全く同じに見ているわけである。そうして後の多くの学者はこの説を更にくわしくして、同じ類推ながらその中で、両者の相違を種々に論じているが、しかし少くとも古代においては「すら」が必ずしも類推一点張りではかたづかないように、「だに」ももう少し別の観点から見ることがある。

たな霧らひ雪も降らぬか梅の花咲かぬがしろに添へで谷見む（万巻八・一六四二）

事繁み君は来まさずほととぎす汝太爾来鳴け朝戸開かむ（八・一四九九）

三輪山を然も隠すか雲谷裳心あらなも隠さふべしや（一・一八）

面忘れ太爾もえずやと手握りて打てども懲りず恋の奴は（十一・二五七四）

髪谷母搔きはげづらず履を谷はかず行けども（九・一八〇七）

朝霞鹿火屋が下に鳴く蛙声谷聞かば吾恋ひめやも（十・二二六五）

これら古代の「だに」の代表的用例において、果してこれを類推と称して当るであろうか。それが承ける事物（「添へて」「汝」「雲」等）と同種のもの意識がバックにある点では、もし類推という語を広義にとれば、当るかも知れないが、表現の心理に忠実に即するならば、むしろバックにある同種ものを拒否して「他はともかく、せめて……だけでも」と強く限定するのが「だに」の意義である。かくその承ける語を押し出す点では、前に私が「すら」の本義として述べたのと似てはいるが、しかし下への連続が両者大いに異なる。「すら」は極端なものを出して、下の叙述との不調和（しかもそれが事実として成立する）に対する奇異感をかもすのに対し、「だに」は最小限に限定し、それだけは「ぜひ……したい」とか「……せよ」とかいう情意的陳述へ続けるのである。いわば「すら」の特出と「だに」の限定とは方向が逆であり（この点から従来両者の意義の相違を「重きを挙げて軽きを推す」「軽きを挙げて重きを推す」などと軽重の差で説明したのであろう。）これがおのずから下の陳述の相違（原則として「すら」は事実

の直叙に続き、「だに」は意志、命令、疑問、否定、假定等の主観的な形式に続くを導き出すのである。(ちなみに形態的に下の陳述の相違によって「だに」と「すら」との差を説いて最も周到な論に、加納協三郎氏の論文「だにすらの用法上の差異に就て」国語と国文学 昭和十三年六月がある。)

こんなわけで、少くとも上古の「すら」と「だに」は従来一般に考えられているほど相近いものとはいえないのである。ところが平安朝に入って両者の接近が甚だしくなった。平安朝を主とする従来の多くの文法説が両者の類似を強調するのはこのためである。そこで以下両者の接近の過程を取上げて本稿を結びたいと思う。

両者の接近とは、実は「だに」が「すら」へ近づきその領分を侵したことである。そうしてその萌芽はすでに万葉集にも見えるのである。加納氏は前記論文で「だに」がその用法の原則から見て「例外ともいふべきもの一首及び不確定のもの一首」を挙げておられる。すなわち

彦星は嘆かず妻に言谷毛告爾叙来つる見れば苦しみ(十・二〇〇六)

あしひきの山沢をぐを摘みに行かむ日谷毛相為母は責むとも(十一・二七六〇)

後者は流布本では「日谷毛相將」で加納氏が言われるとおり問題無く、またたとえ「相為」でも尊敬動詞「逢はず」の命令形とすれば、やはり例外にはならない。前者は、新考によれば「爾」を「等」の誤として「言だにも告らむとぞ来つる」となり、「だに」の下が意志形で、例外ではなくなると加納氏は言われるが、私はこのような例外の存在する可能性を認める。すなわち、意義は限定のまま(「せめて言葉だけでも告りに来たことである」)事実の直叙に連続する新用法を生じたわけで、この種の例は加納氏の挙げておられないものになお二首ある。

風を太爾恋ふるはともし風をだに來むとし待たば何か嘆かむ(四・四八九)―下の「だに」は例外ではない
ひなぐもり碓氷の坂を越えし太爾妹が恋しく忘らえぬかも(二十・四四〇八)

前者は「風だけでも恋うるのはうらやましい」、後者は「碓氷峠を越えただけでも妹が恋しく……」の意である。(後者を加納氏はあるいは「忘らえぬ」という否定に続くものとして例外とせられなかったのも忘れないが、この否定は「だに」とは呼応しない)。

このように意義は本来の限定で下に事実の直叙を伴う「だに」の用法が、平安朝に入ると急に増加し、しかもそれが更に意義までも「すら」を侵して、仮名文では「すら」はほとんど見られなくなる。加納氏によると、古今集には「すら」は一例も見られないという。そうして「だに」が「すら」に代った例として次のような歌を挙げておられる

雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらむ(卷二)

君を思ひ沖津の浜に鳴く鶴の尋ね来ればぞありとだに聞く(十七)

夢にだに逢ふこと難くなりゆくはわれやいを寝ぬ人や忘るる(十五)

白雲の絶えずたなびく峯にだに住めば住みぬる世にこそありけれ(十八)

これらをひっくり返して加納氏は事実の直叙に続く点で「だに」が「すら」に代ったものとしておられるが、私に言わせれば意義の上でその代り方に段階があるのであって、前二者はなお「だに」の本義の限定の意を保ち、「雪とばかり降るだけでも惜しいのに」「尋ねて来るからこそ無事であるだけでも聞くのだ」、後二者に至ってはじめて形態のみならず意義においても完全に「すら」の領分に入っている(「うつつはともかく夢なら逢うこともできそうなのに、それも難くなってゆくのは」「ほかの所ならともかく、白雲の絶えずたなびく峯に住むことなどできそうもないのに、そんな所にも住めば住むことのできる世であったよなあ」―共に「だに」の承ける語が特出せられ下の叙述との関係に奇異感が出ている)。極端を特出する「すら」と最小限に限定する「だに」とは、意義において全く逆方向なのに、これが通じるようになることは一見不思議のようであるが、限定がおのずから含んでいる強示の意が

「すら」の特出の意に近づくことは、理論的にも決して不可能なことではないのである。

右の状況を、散文に例を取って源氏物語に見よう。吉沢、木之下両氏の「用語索引」によると、源氏にも「すら」は一例も無く、「だに」が本来の自分の用法と「すら」のとを兼ねている。「すら」に代っている用例を巻頭から少し拾ってみると、

さむべきかたなく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも問ひ合すべき人だに無きを、忍びては参り給ひなむや（桐壺）

女御子たち二所此の御腹におはしませど、なすらひ給ふべきだにぞ無かりける（同）

慰むやとさるべき人々を参らせ給へど、なすらひに思さるるだにいと難き世かなとうとましろのみよろづに思しなりぬる（同）

等は、本来の限定の意を保ちながら、下は「すら」式に事実の直叙に続いている例と言えようし、

命長さのいとつらう思う給へ知らるるに、松の思はむ事だに恥かしう思ひ給へ侍れば、百敷にゆきかひ侍らむこととはましていと憚り多くなむ（桐壺）

いでや、上の品と思ふだに難げなる世をと君は思すべし（帚木）

荒れたるくづれより池の水、影見えて、月だにやどるすみかを、過ぎむもさすがにて、おり侍りぬかし（同）

この二つの事を思う給へ合するに、若き時の心にだに、なほさやうにもていでたることは、いとあやしく頼もしげなくおぼえ侍りき。今より後はましてさのみなむ思う給へらるべき（同）

等は、意義においても積極的な特出になつてゐるようで、すなわち完全に「すら」に代つてゐるものと言えよう。

（下に「まして……」を伴う形式が極めて多いことも注意すべきである）。

さて、このように仮名文において「だに」が「すら」に代っている状態は、平安朝貴族の日常語の反映と思われるが、しかし注意すべきは「すら」がこの時代に決して断絶したのではないことである。漢文訓読の文章において上古以来「すら」が引続いて用いられていること（おおむね副詞「尙」の上に「すら」が補読される）は点本の研究によって明らかであり、口頭語でも一部の階層には、これが細々とながら用いられていたのではないかと思われる。従って、院政期になって今昔物語に多くあらわれる「すら」の変形「そら」も、決して忽然としてあらわれたものではないのである。

今昔物語における「そら」と「だに」との関係は、点本や万葉等のそれと同様である。全篇に当る余裕が無いので任意に卷二十四を検すると、「そら」は

云フ甲斐無キ女ソラ如此シ、況ヤ朝綱文花思ヒ可遣シ（第二十七話）

兼テ仰セ有ラムニテソラ躬恒貫之カ読タラム様ニテハ何テカアラム、増シテ俄ニ糸破無キ仰言也（第三十一話）

只有ツルソラ打憑テ遙ニ来タル夫ハ去テ物食ハム事モ不知、此様彼様ニ構ツツ過ケルニ、増テ重キ病ヲ受テケレハ思ヒ遣ル方無ク、哀レニ心細ク思テ臥タルニ（第五十話）

本ヨリ見タラム女ソラ疎カラム程ニ然ヤハ可有キ、従者ノ為ム様ニ女ノ居タリケル所ニ押入テ責ケレトモ（第五十六話）

の四例を見るが、すべて下に「況ヤ、マシテ」の類推事項を伴う用法に立っている。（最後の例は「ましてこのはじめての女にそんな事をすべきではないのに」の意が省略されている）。これに対して「だに」はすべて限定の意で、しかも下は仮定、否定等に続いている。

なお、今昔物語とほぼ同期の作品といわれしかも同系統の説話集「打聞集」には、不思議に「すら、そら」が無く

草仮名文と同様に「だに」が「すら」の用法を兼ねている。例えば

此ゾ仏ダニ子ヲ思給フ道ハ他人ニハ異也。倍テ我ヲ衆生ハ子思ニ迷ム事理也（第十二）

中世に入ってから「すら」と「だに」との関係は、これに「さへ」がからんで来て複雑になり、観点を新たにすべき問題である。

（一九五六年五月）